北京で終戦

小松常正さん（天下町・74歳）

昭和二十年八月の終戦の時、私は妻と子供三人と共に北京に住んでいました。

突然の終戦、しかも敗戦です。それまで日本人さまざまであった中国人は、終戦の日から態度がガラリと変わりました。北京郊外へ行くには、北京市内を取りまいている城壁の城門を通るのですが、終戦前は日本軍の監視がいて、そこを通る中国人を全部検査していました。もちろん、日本人は堂々と通行できました。ところが終戦になったら、替わりに中国の武装した官憲が城門で日本人を検査するようになりました。ある日、街を歩いていると、小輩（子供のこと）がブツカッテ来て、持っていた紙包みを路上に落とし、中のセトモノが割れたから（初めから割れていたかもしれない）弁償しろと言って騒ぎ立てました。私がそうでないと言っていると、中国人のヤジ馬が集まってくるし、中国人の警官もやって来て、やはりお前が悪いから弁償しろと言われました。また、自転車で街を行くと、中国の兵隊が数人寄って来て、私から自転車を取り上げてしまうし、さらに夜間、数人の中国兵が銃剣を持って、しかも土足で室内に上がり込み、目ぼしい物を没収して行くなど、次第に治安が悪くなって外出も出来なくなりました。

そこで領事館から集結命令が出たのです。この命令も、今日通達が来て明日実行しなければならないという非常に火急なもので、もちろん、家財道具を整理して運搬する時間的余裕など全くありません。伊豆大島の三原山噴火の際、避難する人たちをテレビで見ていましたが、あんなものではありませんでした。敗戦の時、外国（しかも相手国）にいるべきでないことを身にしみて感じました。

その集結の時です。四トラックに隣近所の家族がわれ先にと乗り込むので、みんなあわてふためいていました。トラックが出発間際になって、妻が長男（五歳）がいないと言い出したので夢中で捜していると、トラックの後ろの方で「母さん母さん」と言って泣いている長男を見つけました。私は、あわててトラックからとび降り、長男を抱き上げて乗せたのですが、もしあの時、気が付かないで置き去りにしたならば、残留孤児になっていたかもしれません。中国残留孤児が訪れるたびに当時のことを思い出し、ぞっとして冷や汗が出る思いです。

戦争は、なんとしてもやるべきでないことを、身にしみて感じました。あくまで平和を持続し、国民の幸福と国の発展を願います。

こわい戦争

藤原　薫さん（上川沿小6年）

わたしは、本でしか戦争を知りません。原ばくを落とされた時の熱さや、鉄砲でうたれた時のいたさなんか、ひとつもわかりません。

戦争の本を読んだことがあります。もし、わたしがその戦争の行われていた時に生まれていたらと、思うと、ゾーッとしてしまいます。わたしだったら、ばくだんや鉄砲のこわさに、一分もがまんできないと思います。もし、お父さんやお母さんと、はなればなれにでもなったりしたら、わたし一人では、絶対生きられないでしょう。

広島に原ばくが落ちたとき、わたしたちが夏のむし暑いと思っている温度の何百倍も何千倍も熱かったそうです。熱くなった川に入って焼け死んだり、水が出ないじゃ口の前で死んでしまったりする人が、数えきれないほどいたそうです。わたしが読んだ本には、真っ赤な火の中で死体が何百人もたおれている気持ち悪い、こわい絵がのっていました。

また、放射能をあびてしまい、戦争が終わってからも病気で死んでしまったりした人もいます。右も左も死体が数えきれないほどあるなんて、想像しただけでも気持ち悪くなります。わたしは、こんなおそろしい戦争の時に生まれなくて、本当に良かったと思います。

夏の甲子園で行われる高校野球を見ていると、試合のと中で、もくとうをします。わたしは、最初、なんで目をつぶっているのかわかりませんでした。この時間は、原ばくが落とされた時間なんだそうです。テレビを見ながら「四十二年前の今ごろ、原ばくが落とされていたのか」と、思うと、不思議な気持ちになります。

今は、何でも食べられますが、むかしは、ほとんど食べ物がなかったそうです。着る物も、住む所にも困ったそうです。それに比べたら、今はとても幸せです。

生命の尊さ

佐藤智恵子さん（柄沢字狐台・29歳）

戦争の経験がない私には、テレビ、映画そして両親の話ぐらいでしか知識がありませんが、やはり悲しみ、恐ろしさなどは感じます。でも、実際に経験のある人は、もっともっと大きな恐怖感があったことでしょう。

今の世の中、平和といってもいろいろな犯罪が起きています。人が人を殺したり、自分の命を自分自身の手で絶ったりしています。

私には、子供が二人います。子を産み、育てていく中で、親のありがたさを感じます。子供を育てることは、とても大変ですが、大きな喜びでもあります。病気やケガをしないで、人に迷惑をかけず、スクスクと成長をしてほしいと願っています。

命というものがどんなに大事で、大切なものか、子育てと看護婦の職業を経験して私はわかりました。

幸福は、自分自身でつくりだすことはできますが、核兵器はつくりだしてはいけない、戦争を起して苦しみや、悲しみを与えるような世の中をつくっては、絶対、絶対いけないと私は思います。

▲次代をになう子供たち

広報係で「平和」についての作文を募集したところ、十七人の方がご応募くださいました。どうもありがとうございます。その中から、四人の方の作文を掲載させていただきました。